

# 論北杜夫〈在谿谷中〉 —台灣寬尾鳳蝶採集的故事—

邱若山

靜宜大學 副教授

## 摘要

日本《新潮》雜誌 1952 年 2 月號刊載的〈在谿谷間〉（「谿間にて」），是作家北杜夫所寫的唯一與台灣有關的作品。收錄於同年日本文藝家協會編輯的《1959 創作代表選集》及其後的多種北杜夫選集中，是北杜夫的名作之一。

〈在谿谷間〉的作品內的時間，設定於二次大戰終戰後的第二年。「信州從島島宿越過德本峠進入上高地的谿谷間」是作品的第一舞台。當時是高中生的主角「我」在這裡遇到了一個在挖「蟻巢」的人，是個在挖掘「胡麻蛭蝶」幼蟲的隱性研究者。此人告訴「我」關於以前他在從事捕蝶人工作時，尋找、捕捉寬尾鳳蝶的親身經驗。台灣的埔里、卓社大山是故事的第二舞台，也是作品中的主要舞台。這篇作品所寫的是：捕蝶人為了採集鳳蝶中的世界性珍種「寬尾鳳蝶」，所傾注的人性的貪欲、執念，認知它的徒勞而開悟的諦觀，以及其人從職業捕蝶人轉型，發願將自己的工作成果貢獻給學術研究，從其中發現生命價值的過程。

本論文論述此篇屬於自然生態文學領域的北杜夫佳作的作品世界。

關鍵字：北杜夫、谿谷間、寬尾鳳蝶、捕蝶人、胡麻蛭蝶

受理日期：2016.09.03

通過日期：2016.10.14

**On Morio Kita's "In the Valley" – a story of the collecting of  
Agehana maraho butterfly in Taiwan**

Chiou, Ruoh-Shah

Associate Professor, Providence University

**ABSTRACT**

Published in Shincho magazine in February, 1952, "In the valley" is the only work by Morio Kita that takes place in Taiwan. It was republished in the *Anthology of Representative Works of 1959* by the Japan Writers' Association and in various subsequent collections of Morio Kita. It ranks among his finest work.

The story of "In the valley" takes place two years after the end of World War II. "From the inn of Simazima, over Tokugotoge and into the valley of Kamikochi" constitutes the first setting of the work. Here, the high school protagonist "I" meets a researcher who excavates ant nests in search of the larvae of *Maculinea teleius* butterfly. The researcher tells "I" about his experiences of catching Agehana maraho when he was a butterfly collector. The second, also the main, setting of the story takes place in Taiwan's Puli and Zhuoshe Mountain. The story depicts a man's journey from being greedy and obsessive of trying to catch the very rare Agehana maraho of the Papilionidae family, to the attainment of true mindfulness at the realization of the futility of the endeavour and the value of life, and the later transformation from being a catcher to a researcher.

The present investigation studies Morio Kita's great work that belongs to the genre of natural ecological literature.

Keywords: Morio Kita, In the Valley, Agehana maraho, butterfly collector,

*Maculinea teleius*

# 北杜夫「谿間にて」について —台湾フトオアゲハ採集の物語—

邱若山

静宜大学副教授

## 摘 要

『新潮』昭和34年(1959年)2月号に掲載された「谿間にて」は、北杜夫が書いた唯一の台湾関係の作品である。同年日本文芸家協会編集の『1959 創作代表選集』(昭和34年前期)の一作として収録されている。その後も北杜夫選集などにたびたび収録されている北杜夫の秀作の一つと言える。

「谿間にて」の作中時間設定は終戦の翌年である。〈島々の宿から徳本峠を越えて上高地に入る谿間〉が作品の第一舞台であるが、当時、高校生であった主人公の〈私〉がここで〈蟻の巣〉を掘る男に出会う。〈ゴマシジミ〉の幼虫を探している在野の研究家のような人である。この男が語ってくれたのは、むかし自分が蝶の採集人だった時、台湾において、フトオアゲハに出会い、それを追いかけて採集した話である。台湾の埔里、卓社大山が作品の第二の舞台で作中の物語の主な舞台となっている。世界的な揚羽蝶(鳳蝶)の珍種であるフトオアゲハを採集するために賭けた人間の貪欲さ、執念が描かれ、そしてそれが徒労だと悟り、諦めることが描かれている。また、そのことを通して蝶の採集人から学術研究に役に立つ人間になろうとした男の、生甲斐の発見が語られている。

本稿では、北杜夫が創作した、自然生態文学のジャンルに属するこの作品の世界を究明していきたい。

キーワード：北杜夫、谿間、フトオアゲハ、蝶の採集人、ゴマシジミ

# 北杜夫「谿間にて」について —台湾フトオアゲハ採集の物語—

邱若山

静宜大学副教授

## はじめに

「谿間にて」は「新潮」昭和 34 年（1959 年）2 月号に発表された北杜夫の秀作で、北杜夫が書いた唯一の台湾関係の作品である。昭和 34 年上半期芥川賞の候補作品になり、同年日本文芸家協会編集の『1959 創作代表選集』（昭和 34 年前期）の一作として収録されている。

筆者はかつて「近代日本文学における台湾像」<sup>1</sup>で戦後、台湾に関わる文学作品の一つとして〈主人公の殖民地時代のフトオアゲハの採集談〉という内容紹介で「谿間にて」を取り上げている。筆者の研究対象として予定していた作品である。

北杜夫研究は、「幽霊」（1954）を中心とする初期作品、それから芥川賞受賞作「夜と霧の隅で」（1960）、第 18 回毎日出版文化賞受賞作『楡家の人々』（1964）などに集中しているが、本論文では、北杜夫が芥川賞受賞に向けて邁進し、全盛期を迎える時期の重要作品でありながら、これまで十分に研究されていない「谿間にて」に焦点をあて、論究する。

## 1. 北杜夫と芥川賞と「谿間にて」

### 1.1 北杜夫と芥川賞

北杜夫の年譜では、〈1960 年（昭和 35 年、33 歳）3 月、『ドクトルマンボウ航海記』を中央公論より刊行。5 月、「夜と霧の隅で」を

---

<sup>1</sup> 『特集 台湾からみる日本—進化する国際コラボレーション』『アジア遊学』69、勉誠出版、2004 年 11 月

文芸誌『新潮』に発表、同作で第 43 回芥川賞を受賞。) <sup>2</sup>という事項が記されている。実際、北杜夫は「夜と霧の隅で」での受賞まで、合わせて四回、芥川賞の候補になっている。第 36 回 (昭和 31 下) 「人工の星」、第 37 回 (昭和 32 上) 「狂詩」、第 41 回 (昭和 34 上) 「谿間にて」がそれぞれ候補作になりながら、受賞を逸した。北杜夫自身も「夜と霧の隅で」の受賞について次のように語っている。

3

ぼくは四回、候補になったから、しまいには落第なれしたみたいで、芥川賞とったときは、もう「マンボウ航海記」を書いて、それがけっこうベスト・セラーになったから、それほど感激しなかったね。

「夜と霧の隅で」の選評<sup>4</sup>については本論文の課題ではないが、しかし、その選評に「谿間にて」に触れたところが多かった。〈昨年夏に候補作品となった「谿間にて」に比べて、厚みと幅とを加えたようだ〉(石川達三)、〈「谿間にて」よりもこんどの方がまた進歩している〉(滝井孝作)、〈この前の「谿間にて」にくらべると幅と重厚味がある…堂々たる作品だ〉(井伏鱒二)、〈僕はその最初の機会から、その文学精神の高さを認め、幻想的な実感もしくは実感的な幻想に興味と期待とを持っていた。(中略)一作毎に進境を見せて、一脈のユーモアがよく一般性をつなぎ、コクのある文体とともに、超自然主義的な一家の機杼(独自の作風)を示しているのを尊重した。〉(佐藤春夫)、〈前回「谿間にて」が候補作に取り上げられたことも、この作者の力倆を知るよすがとなったようだ〉(永井龍男)、〈私がこの作品を殊更にほめるのは、前の(第四十一回の)時に、私が欠点が

---

<sup>2</sup> 「北杜夫略年譜」『高原文庫』第二十七号(北杜夫展 美しい夢とユーモア、ふたたび) 軽井沢高原文庫 2012 年 7 月。

<sup>3</sup> 奥野健男「短編について」『北杜夫の文学世界』中公文庫、昭和 57 年 4 月、116 頁。

<sup>4</sup> 「第四十三回芥川賞選評」『芥川賞全集』第六巻、文芸春秋社昭和 57 年 7 月。

あるので『山塔』より『谿間』を推薦したからである。) (宇野浩二) というように、佐藤春夫が〈北杜夫氏の作が嶄然一頭地を抜いていた〉と推薦したように、多くの詮衡委員が「夜と霧の隅で」の受賞を推薦しながら、選評で、前回の「谿間にて」に触れている。

では、斯波四郎の「山塔」との決選で落ちた「谿間にて」は当時どんな評価を受けたかと言うと、次の通りである。<sup>5</sup>

- ・北君の「谿間にて」は昆虫採集者の面白い話を書いているが、その話を聞く(私)という人物がマイナスになっている。むしろ直接に昆虫採集者を書いて行った方が迫力のある作品になったろうと思った。モーパッサンの短編などに、この種の技法は多いが、この作品の場合、それが成功していないようである。

(石川達三)

- ・自分の嗜好から云えば「谿間にて」をあげたいが、第二章以下が形の上で平板に終わっているので挙げかねた。(井伏鱒二)
- ・「谿間にて」は、話は面白いが、前後に無駄が多すぎます。(中村光夫)
- ・「谿間にて」は健康な作品で、快く読めた。席上で石川達三氏が評したように、挿話としてではなく、昆虫採集人をまともに書いたなら、さらに重量ある作品になっていたろうと思う。(永井龍男)
- ・北杜夫氏の「谿間にて」は蝶を採集する台湾の山などの書き方に足りないものがあるようで、実感があふれ出てこない。(川端康成)
- ・三君のうち北杜夫君は見るから最も年少らしく文学歴も最も浅いらしいから受賞はもう少し待ってもよいと思う。その文学精神は最も純粹で高いのが好ましいし着眼点もいいが作法的に未熟な点もある。とは云え前の作より一作一作とよくなって来ているのは頼もしい。将来に希望をかけて今は強いて受賞をあせ

---

<sup>5</sup> 「第四十一回芥川賞選評」『芥川賞全集』第六巻 文芸春秋社 昭和57年7月。

るにも及ぶまい。(佐藤春夫)

- ・北杜夫氏の「谿間にて」は最後まで面白く読んだが、蝶を追いかける人物を正面から書いたらもっと力強い作品になったと思う。(井上靖)
- ・こんどは、北杜夫氏の「谿間にて」が、図抜けて佳いと思った。これは一寸珍しい素材で、遠い台湾の山地にまで出かける、昆虫採集業者の話で、その主人公のはげしい性格と情熱と、自然の風物の色合なども、かなり描けていると思った。(滝井孝作)
- ・北杜夫の『谿間にて』は、(中略)私は、この小説はなかなか『見所』がある作品だと考えた。(宇野浩二)

と、滝井孝作、宇野浩二の絶賛以外は、話題の面白さ、文学精神の高さなどが評価されながらも、作法、技法の未熟な点が指摘されている。〈挿話としてではなく、昆虫採集人をまともに書いたなら〉、〈蝶を追いかける人物を正面から書いたら〉と、作品の構造に意見したのは、主に昭和前期に活躍していた作家で、大正期に名を成した作家、宇野、佐藤、滝井はそれを問題としなかった。ここで作品の構成に挿話形式を多用する大正期作家と昭和期の作家の違いが自然と現れていて、面白い。また、この回の選考における、「谿間にて」をめぐるのではないが、佐藤春夫と永井龍男との間で繰り広げられた激しいやり取りは芥川賞選評において有名であった。<sup>6</sup>

## 1.2 「谿間にて」の物語の構成

前述のように、多くの芥川賞選考委員に、着眼点は面白いが技法に未熟なところがあると指摘された「谿間にて」の物語は次のような構成と内容からなっている。

終戦翌年の四月に上高地に入る谿間で高校生の〈私〉がゴマシジミの幼虫を掘り探す男に出会い、その男が語ってくれた戦前台湾で世界の珍蝶フトオアゲハを採集した話を〈私の心象のなかで私の夢を駆りたてながら〉記した物語である。小説は3節に分けられて

---

<sup>6</sup> 鶴飼哲夫『芥川賞の謎を解く—全選評完全読破』文春新書 1028、2015年6月)

いて、〈私〉が谿間に入る背景と、そこで男と出会った過程が第1節。男が語ってくれた、台湾で蝶の採集人としてフトオアゲハを追いかけた経験が第2節で、そこで男自らが〈俺〉という一人称で陳述する会話文と、〈彼〉という三人称で男の言動を転述する地の文の交差によって、男の台湾でのフトオアゲハの採集物語が描かれている。第3節では、第1節の現時点に立ち返り、私が男の話聞いた後、考えたこと、感じたこと、また再び現実世界に戻ったことが描かれている。

物語全体の語り手が作中の人物〈私〉であることと、それを作者が語る設定という「谿間にて」の構成は、大正期作家がよく使う挿話の手法なのである。<sup>7</sup>

## 2. 「谿間にて」についての評価及び先行研究

筆者の知る限りでは、「谿間にて」のみをとりあげた作品論はないが、前節で触れた芥川賞選評関連の評価以外に、この作品は、北杜夫の文学の課題や外の作品についての論究で、幾つか言及されている。

### 2.1 平野謙「文芸時評」

「谿間にて」についての最大の評価をしたのは平野謙である。平野謙は「谿間にて」が発表された直後、毎日新聞『文芸時評』「昭和三十四年二月」<sup>8</sup>で先ず、

〈今月の秀作として、私はまず北杜夫の「谿間にて」(新潮)を推したい、と思う。(中略)出色の出来ばえである。おそらく作者にとっても、力をだしきった会心の作に違いない。〉

と、本作を肯定し、続いて、

〈敗戦直後の食糧事情などを背景とする一高校生の見聞記というワクそのものも、作の中味とかなりうまくつりあっている。

<sup>7</sup> 例えば、芥川龍之介の「河童」や、佐藤春夫の「美しい町」などはその代表的な例である。特に「河童」の第一舞台も信州である。

<sup>8</sup> 平野謙「文芸時評 昭和三十四年二月」(毎日新聞)、『文芸時評』河出書房新社、昭和53年3月)



(中略) この作をチャンと批評するには、登山の経験や生物学の知識などもあるいは必要かと思われる。(中略) そういう方面にまるで無知な私を一応感服させたことは、かえって作者の想像力や筆力の卓抜を証明している。)

と作品の背景設定、中身、作者の想像力と筆力を評価している。そして、〈蝶の採集をナリワイとする人間の存在〉という設定に〈一種の新奇なものに対する満足感〉を持ちながら、

〈私が感心したのは、好奇心という程度を超えて、人間のほとんど無目的な執念がここに定着されてある、と感得されたことだ。金銭や名声に対する執着なら人間だれしもありふれたものだが、そういうありふれた執着がときとして金銭や名声という目標を踏みこえて、ほとんど無目的な情熱と化し、その人間を破滅させようとする瞬間がある。そういう人間のすがたは、(中略) 生命力の燃焼として、人を感動させるにたるだろう。「谿間にて」には、そういう執念の構造みたいなものがかかなり巧みに定着されてある。(中略) 話全体のシメクケリも、私にはすなおに受けとれた。〉(下線は筆者。以下、本論文における下線はすべて筆者が施したものである)

〈自然観照の目もなかなかよくきいている、と思えた。〉

と、作品における、人間の無目的な情熱と執念、生命力の燃焼を具現する人間の姿の描写の巧みさと、自然観照の目の確かさなどを評価している。

## 2.2 なだいなだ「解説」<sup>9</sup>

なだいなだは北杜夫の幼少時代からの昆虫学への興味が作品創作に齎した影響を指摘する。

〈北杜夫は、その幼少時代から、ほとんど偏執的とも思われる昆虫学への興味を示している。初期の作品以来、どのような作品の中でも、彼が昆虫をえがく時は、現在までの日本のいかな

<sup>9</sup> なだいなだ「解説」『北杜夫集』(新潮日本文学 61) 新潮社、昭和 43 年 10 月

る作家の筆もおよぶまい。〉

また、〈彼の初期の作品は、マンの影響のみでは説明できない。短編小説に関する限り、そして、その中の会話に関する限り、ヘミングウェイの文体の影響を強く受けている。〉と、北杜夫の初期作品がトーマス・マン、ヘミングウェイの影響強く受けていることを指摘しながら、

〈「谿間にて」にえがかれた人物なども、一見すると、ヘミングウェイの「老人と海」を思わせるものがありながら、それはニーチェ的な権力への意思を形象化するようなオプチミズムを感じさせない。その底には、ペシミズムが流れている。〉

〈だが、「老人と海」の老人は、魚と向い合っているのではなく、自己と向かい合っている。自己の「力への意志」と相対している。「谿間にて」の昆虫採集者は、蝶と向い合うことで、自己を一個の蝶的な人間としている。そこには北杜夫の変らぬ人間に対するペシミズムがうかがわれる。〉

と、「谿間にて」と「老人と海」の近似と峻別、北杜夫のペシミズムを提起している。

### 2.3 村松剛「北杜夫の世界」<sup>10</sup>

村松剛は、

〈「どくとるマンボウ航海記」の刊行にさきだって、北杜夫は短編の秀作「谿間にて」を発表している。フトオアゲハという名の蝶を追って、ついに人生を狂わせた男の物語である。北の短編のうちで、記念碑的な作品だろう。〉

フトオアゲハという世界に珍しい蝶を追って、主人公は人生を踏みちがえた。北杜夫も、美しい蝶を追って瞳を少年のように輝かせている。〉

と論じ、「谿間にて」を北杜夫の短篇に於ける〈記念碑的な作品〉としている。

---

<sup>10</sup>村松剛「北杜夫の世界」『北杜夫の文学世界』（『國文學 解釈と鑑賞』至文堂、昭和49年10月）

## 2.4 奥野健男『北杜夫の文学世界』<sup>11</sup>

これまでたびたび北杜夫を取り上げている文芸評論家奥野健男は評論集『北杜夫の文学世界』で、

〈北杜夫文学の魅力は、作者がみずみずしい少年の魂を喪わずに、いつまでも保っているところにある〉。〈昆虫は少年の魂の結晶ともいうべき北文学の表象である〉。(「昆虫の王国」 p27)

〈昭和二十九年の長編「幽霊」は幼年時の心の神話を描いた。(中略)ここでは、つねに昆虫が重要な脇役をつとめている。つづいて書く「岩尾根にて」にはハエが、「羽蟻のいる丘」には羽蟻が、そして「谿間にて」は台湾に世界の珍種フトオアゲハチョウを追いもとめる男が、等々、昆虫は北文学の大切な場面に必ず出てくる。〉(「昆虫の王国」 p28)

と、北文学における昆虫の世界とその位置を強調し、また、

・〈「浮標」で朝鮮を、「谿間にて」で台湾を、「埃と燈明」でメキシコを、さらには「不倫」で地球でない星の生物をと、彼はまだ見ぬ土地を想像で描く。作家の想像力はなみなみならぬものがある。〉(「短編について」 p101)

と北杜夫の作家としての想像力に賛嘆しながら、

・〈「異形」「谿間にて」の戦争直後の登山者のいない山を舞台にした異様な幻想、それは自然物に還元したい人間のニヒリスティックな願望を象徴している。〉(「短編について」 p 103)

とその〈自然に還元したい人間のニヒリスティックな願望〉を強調している。

以上のような北杜夫の文学の特色についての指摘に、奥野はすべて「谿間にて」を作品例の一つとして挙げている。

## 3. フトオアゲハについて

〈フトオアゲハという蝶は昭和七年ごろ台北州烏帽子河原では

---

<sup>11</sup>奥野健男『北杜夫の文学世界』中公文庫、昭和57年4月

じめて発見された珍種中の珍種である。特に変つているのは後翅の尾状突起の幅が広く二本の翅脈を持っていることで、このような鳳蝶（あげはちょう）は他に支那に一種知られているにすぎない。すでに種属保護のため採集を禁止されていたが、今までに採集された数はわずか六匹だけである。彼はそうした話を聞いてもいたし、雑誌に載った原色写真を見せられてもいた。）（テキスト①P228 ②P674）

「谿間にて」ではフトオアゲハについては、以上のように、〈彼の語ったことが地の文になっている。ほかにも〈だしぬけに黒っぽい影〉〈後翅に白と柿色の紋がある〉などのように、フトオアゲハを追っかける〈俺〉の語りが書かれている。

フトオアゲハについての研究は、戦前の台湾で進められていた。台湾総督府の報告書『台湾産の蝶類に就て』に、それが記録されている。<sup>12</sup>

・〈現在台湾に産する蝶類は日本帝国全土に於て判明し居るものの五分の三以上を占めて居る。即ち三百二十七種は台湾産である。此の中五十六種は世界的珍種で他には産しない。〉

・〈之等台湾の固有種は十数種を除きては何れも其の発生数少く遂には自滅する事あるを予想せられ得る様なものが多い。茲に於て全部に対する保存を必要と考へらるゝも、珍種中の珍種とも云ふべき *Papilio maraho, Siraki et Sonan*（フトオアゲハ）一種を今回特に天然記念物として取扱はるゝ様切望するを以て、取り敢へず次に其の記述をなし一般的に周知せしむる事とする。〉

・〈「フトオアゲハ」は現在中部支那から発見せられて居る後翅尾状突起に二個の翅脈を有する珍蝶 *Papilio elwesi, Leech* に極めて類似している大形の蝶で、一昨年及び一昨々年に亘り北部

<sup>12</sup> 台湾総督府内務局『天然記念物調査報告』第三輯。昭和10年7月。台湾総督府史跡名勝天然記念物調査委員会（台北帝国大学教授農学博士素木得一）。

台湾の而も標高二〇〇米以下の所謂平地で採集せられたもので、斯の如き大形の蝶が今日まで発見せられなかつた事は聊か意外とするところである。又分布学上より見て台湾と支那大陸、殊に中部支那との関係の重要性を有する事の一例となり、東洋自然界における変遷等に深き興味を与ふる訳である。而も此の maraho と elwesi とは共に世界に発見せられる *Papilio* 中、形態学的に珍種であるが、更に蝶学上特筆に値する事と思ふ。次に完模式標本により記載をなす。

完模式標本 ♂一九三二年七月 台北州羅東郡烏帽子の河原（標高四七〇尺）鈴木利一氏採集。

副模式標本 ♂一九三三年五月十九日午前九時四十六分、同所に於て素木得一氏採集。

以上二頭の外に新竹州竹東郡シーガオ駐在所付近にて一頭の甚だ不完全な雌が採集せられて居るのであるが、この標本は京都第三高等学校教授杉谷岩彦の所有となっている。）

## 台湾日語教育學報第27号

「谿間にて」作中のフトオアゲハについての記述は前記の調査報告に酷似しており、精確な要約とも言えるものである。また、「谿間にて」の発表よりやや遅れている『原色台湾蝶類大図鑑』<sup>13</sup>では、「戦前における本種の採集記録」が示されている。

1. ♂、台北州羅東郡烏帽子河原、1932年7月、鈴木利一氏採集（出典：素木・楚南 1934）
2. ♂同上、1933年5月19日、素木得一氏採集（出典同上）
3. ♀新竹州シーガオ駐在所付近、1933年7月（出典：杉谷 1935）
4. ♀同上、1934年8月29日、和泉泰吉氏採集（出典：中原 1935）
5. ♂同上、1935年7月20日、金子富雄氏採集（出典：平山、1936）

初めての採集は♂二匹を得たので、確かに作品の中で男が言う通

<sup>13</sup> 白水隆『原色台湾蝶類大図鑑』保育社、昭和35年5月

り「六匹」なのである。北杜夫は蝶の標本収集家<sup>14</sup>でもあり、フトオアゲハについて豊富な知識を持ち合わせていたことは言を待たないが、作品を創作する前に、前記の報告書、或いは戦前の採集記録を全部読んだのではないかと思われる。因みに、フトオアゲハの写真は次の通りである。(インターネット、前掲の『調査報告書』より)



#### 4. 「谿間にて」の世界

##### 4.1 北杜夫における自然と精神の課題、戦後の精神史の一面

作品の始まりから、〈ちょっと島々谷まで足をのばして、噂の洪水が谿間をどれほど変わったかを見て来ようと考えついた。〉主人公である高校生の(私)は、

〈当時、私は松本の高等学校の生徒で毎日嫌になるほど腹をすかしていた。〉(テキスト①P220②P666)

〈腹一杯飯をつめこんだ記憶などここしばらく私には見当たらなかったのだ。〉(同上)

という戦後の窮乏生活に耐えていた現実の中で、

・〈そのときの私について述べれば、なにぶん精神的にも思春期であり、かつ極度の空腹のため尚のこと感傷的であったようだ。それゆえ、この人気のない谿間の風物は私の胸に沁みた。たとえば私は自分を荒れはてた自然の一部だとも思ったし、そのふところに抱かれているのだとも感じる事ができた。〉(同上)

という精神面における感傷を持ち合わせていた。荒廃した谿間を行く途中、キオビセセリモドキが飛んでいるのを見て、

<sup>14</sup> 現在、長野県軽井沢高原文庫の裏にある北杜夫の記念室に蝶を中心とした昆虫の標本が展示されている。

〈わたしがそんな名称を知っているのは子供の時分から昆虫採集に熱中していたからで、信州の学校を志望したのも、この地に珍しい種類が多いというのが理由の一つでもあった。しかしさて入学した時には戦災で標本も何もかも失われてしまっていたし、戦争が終わってみて仲々昆虫採集どころの話ではなかったのである。〉(テキスト①P221②667)

と幼少期の自分の興味や、信州の高校を選んだ理由を自ら思い、道すがら谿間の荒涼たる風景を目にした。

〈谿をはさむ両側の崖の岩は冷たくくすんでいる。この辺では春はまだやってきていない。谿は、枯れて、沈んで、うそ寒かった。〉(テキスト①P221②P667)

〈谿は人間を迎えるどころか、毅然として拒否する荒々しい風貌をおびてきた。〉(同上)

北杜夫の初期の作品には、少年期、青春期の経験—昆虫採集、松本高校在学、標本喪失、食糧窮乏、登山、爆撃を受けた日本の荒涼たる自然、感傷的精神などがよく描きこまれているということがよく指摘されている。<sup>15</sup>これらの作者の実体験や文学的特質は、他のどの作品よりも、具体的にかつ全面的に「谿間にて」で表出されているのではないかと思う。

台湾の学界では、戸田一康「北杜夫の最初期作品群に反復される主題—自然と精神—」<sup>16</sup>が最初でまた唯一の北杜夫文学についての論考である。「病気についての童話」<sup>17</sup>というタイトルでまとめられている最初期作品(「百蛾譜」「幼いメルクリウス」「茸」「岩造の話」「蝦蟇」「俗物」)に基づいて、北杜夫文学の初期で反復されていた

---

<sup>15</sup> 利沢行夫「北杜夫における孤独とペシミズム」、遠丸立「北杜夫における自然と叙情」(『國文學 解釈と鑑賞』501(至文堂1974)特集『北杜夫の文学世界』所収)

<sup>16</sup> 戸田一康「北杜夫の最初期作品群に反復される主題—自然と精神—」『2013年度台湾日本語文学会国際学術研討会会議手冊』2013年12月21日於淡江大学

<sup>17</sup> のちに、北杜夫『牧神の午後』(冬樹社昭和40年)に収録された。

「自然と精神」という主題を論じたものである。「百蛾譜」(1950)を初めとする〈最初期の諸作から、初期の集大成とされる『幽霊』(1954 初版、1960 再出版)との関連性を強く持ち、そして十年後の「船上にて」(1959.01-05)<sup>18</sup>まで抱え続けていた主題だと論じているが、「船上にて」と創作時期が重なっている、というよりも「船上にて」の創作期間中に発表された「谿間にて」という重要な作品に目を向けていないことを、その考察の足りなかったところとして、指摘せざるを得ない。

#### 4.2 台湾の自然描写

〈私は地理が比較的苦手であった。(中略)地理の時間、私は地図といえば豊富な昆虫のいる台湾の地図をひらいて夢想にふけていたもので、台湾以外の地図はほとんど見たことがないのであった。〉<sup>19</sup>

と北杜夫は言っている。「谿間にて」の発表前に北杜夫は台湾を訪れた実体験を持っていない。舞台になっている台湾の自然や人文に関する描写は全部、地図や知識に頼った想像によってなされたのである。北杜夫の台湾旅行は年譜によると、一回だけである。「谿間にて」発表の五年後、1964年4月に『楡家の人びと』出版、11月の第18回毎日出版文化賞受賞の間の7月に行なわれた、香港、マカオ、台湾旅行の時だけであった。

「谿間にて」で描かれた台湾の地理、舞台位置は相当正確である。ただ、男が嘉義から埔里経由で卓社大山へ入るという植物採集、蝶の採集の経路設定は合理的に見えるが、虚構の無理があった。

嘉義から二水までは縦貫鉄道で軽便鉄道ではない。二水からは軽便鉄道と台車の接続である。埔里の町は蝶の産地として有名で、町の描写、そこを行き交う種族の描写は的確である。卓社大山(標高3369m)においてフトオアゲハにめぐり合い、それを追いかけて採

<sup>18</sup>後に『どくとるマンボウ航海記』(1960年5月)の一部になる。

<sup>19</sup>北杜夫「さまざまな乗物と旅」『どくとるマンボウ途中下車』中公文庫、昭和48年9月初、49年5月四版。201頁。



集する場所にした設定は、今までフトオアゲハの採集は、北部、低海拔で出来たという事実へのアンチテーゼ、反措定で、〈だがひょっとして一匹以上いるとしたら、それこそ新産地だし、大発見というものだ〉としている。

#### 4.3 作品に書き込まれた、蝶、昆虫、動物、植物と下界

「谿間にて」では、卓社大山の山頂、山肌、下草、原生林、闊葉林、針葉林、山津波、驟雨、雷鳴など山の中の自然、天候が描かれている。それだけでなく、この作品で北杜夫は沢山の蝶を登場させ、描いている。それを整理すると、ゴマシジミ、小灰蝶、フトオアゲハを始め、計 23 種<sup>20</sup>ある。他の動物：キオビセセリモドキ、クシケアリ、蟬、油虫、蚤、ゴキブリ、ワモンゴキブリ、百歩蛇、アマガサ蛇、ニイタカキクイタダキ、ヤゴ、羌(キョン)、歩行虫(オサムシ)、ミカドキジなど、計 14 種。植物：羊歯、シノブ、ニイタカトドマツ、ニイタカビャクシン、笹、オイワケメダケ、シャクナゲ、ニイタカコケリンドウ、フクトメキンバイ、トドマツ、オイワケメダケ、サルオガセ、ニイタカヤダケ、ワレモコウなど、計 14 種ある。そして、男にとっての下界の記憶である酒飲みや女(ザボ)、紅露酒(あんろうちゅう)などの台湾語、台湾風物までが書き込まれている。

#### 4.4 蝶採集人から隠れた研究者へ——人生の生甲斐の悟り過程

〈「実際、あいつを捕らえたらどれだけで売れるだろう。(中略)俺はもうどうしたって、あいつを採らないうちは山を降りまいとまで決心をした」〉。(テキスト①P229②P674)

蝶の採集者、男はフトオアゲハを捕まえる欲求、所有欲によって決心し、山中を山小屋四泊の五日間さまよった。炎天、雷雨を冒

---

<sup>20</sup> 作品に、ゴマシジミ、小灰蝶、フトオアゲハ、ミヤマモンキチョウ、アリスンキマダラヒカゲ、ナガサキアゲハ、ワタナベアゲハ、ベニモンアゲハ、ナガサワジャノメ、ジャノメチョウ、アケボノアゲハ、南米のモルフォ蝶、アグリラス、ニューギニヤのアレクサンドラアゲハ、シロシジミ、タテハチョウ、キアゲハ、オナシモンキアゲハ、ナガサワジャノメ、ホッポアゲハ、ジャワのアピラス、ワタナベアゲハ、しこたま蝶、など 23 種の蝶が描かれ、書き込まれている。

して、下痢便5回、嘔吐2回、マラリアの冷熱交代、錯覚、幻影、幻覚、幻視、幻想に苛まれ、そして〈俺はくたばるかもしれない〉と恐れながら、執念、徒労の思い、諦念の繰り返しを経て、フトオアゲハを捕獲したのである、と男がその過程を委細を尽くして語ってくれたのである。

男の、絶対この蝶を逃さないという欲求は、フトオアゲハを追いかける中に、獲ってからすぐ売り払って金に変えるという考えから、売り払わないで、暫く自分で持っていたいという考えに変った。世の中の蝶類蒐集家は、金で珍種の標本を買って所有者になり、名声を獲得した人が多いということ、標本というものが学問的に見えてきて、標本を持つことが立派に学問に貢献できること、この珍種の素晴らしい標本を持つことで世を驚かせることが出来、自分が特別な人間になるということを悟った。だから、〈あのフトオアゲハは遁さない〉という所有欲が燃えたぎったのである。

実際、蝶の標本の場合、採集者の名より所有者の名が知られ尊敬され、採集者が埋没しているケースが多い。ただ、フトオアゲハの場合は、前記の資料が示したように、すべての採集者の名が研究史に残されている。

作品のなかで、フトオアゲハのために、男は自分の〈人間が変わった〉ことを、〈私〉に話を聴かせるために、また語りの終わりに繰り返している。その〈人間が変わった〉証拠としては、「蝶を採集して売るなんざあ下劣な商売だよ。本当は草でも虫でも、そりゃあんだ、もっとずっと深みのあるものなんだ。」(テキスト①P245②P689)という悟りで、「俺は学界に貢献するような仕事をするんだ」と言って、今は〈ゴマシジミの生活史をを調べ〉、その謎と秘密をとく仕事をしているのである。

#### 4.5 北杜夫のペシミズムと蝶の意味

男が命をかけて捕獲したというフトオアゲハは結局、その夜の狩猟小屋でゴキブリに食われた。

〈「ゴキブリの野郎だ。三角缶を取り出すとふたが開いていて、

中からその畜生が飛び出してきたんだ。ハッとしたが、もうあとの祭りさ。三角紙は穴があいていて、胴体を綺麗にやられていた。根元を喰いやぶられて傷んだ四枚の翅だけが残っていた」(テキスト①P244②P689)

「俺はカッとなって、それを投げ捨てると、目茶目茶に踏みつぶしちゃったんだ。畜生、せめて翅の切片でも持って帰ってればなあ、そうすりゃ誰だって俺の話を疑うなんてことはなかったんだ」(同上)

「学生さん、あんたも、俺の話を信じられないかい」と聞かれた〈私〉は、〈この男はおそらく本当に一度はフトオアゲハに出会ったのだろう。しかし、採ることは出来なかったのだ。或いは再度その珍種を見つけたのかも知れぬ。だが、結局、捕らえることは出来なかった。或いは、一いや、真相を知っているのは、それこそ神さんか仏さんだけであろう。ただ次のことだけは確かである。もしも男がそんな言葉を吐かなかつたとしたら、少なくとも私は彼の話をすべて真実だと思い込んだはずだ。〉(テキスト①P245②P689) と思った。

男の話に、〈私〉が〈すべて真実だ〉と信じることの出来ないところがある。ゴキブリ防止のために採集品を三角缶から紙箱に移す習慣を持つ男は、卓社駐在所の晩に箱を丁寧に包み、リュックにしまうことをしたのに、珍種中の珍種たるフトオアゲハを普段より丁寧に扱わない理由はないはずである。〈私〉は、男の話を真実だとは思わなかったわけである。

男のすべてが徒労になったことは、北杜夫のペシミズムから言って、当然の物語の設定である。男に「蝶を採集して売るなんざあ下劣な商売だよ。本当は草でも虫でも、そりゃあんた、もっとずっと深みのあるものなんだ。」と語らせ、フトオアゲハのために〈人間が変ってきた〉と語らせたのである。

〈断っておくが、もとより彼はこの通りに話したのではない。しかし私の心象のなかで、私の夢を駆りたてながら、確かに

次のごとく物語ったのである。) (テキスト①P243②P687)

と言っている物語の語り手である〈私〉は、〈ほんの二、三時間前、ここを通った私と、現在の私とがなんだか判然と変わってしまっているような気がしたからである。〉と自覚する。

北杜夫にとって、〈詩は蝶であり、蝶はまた詩そのものである〉、〈北氏を措いて他の誰に〉〈蝶 (= 自然) との親和を素直に、優しく、たおやかに歌えるであろうか。〉と野島秀勝が指摘している。<sup>21</sup>『とくどるマンボウ昆虫記』(昭和 36 年、文庫本昭和 42 年)に「詩人の蝶」(アポロチョウ = ホメロスの蝶)、「高山の蝶」が収録されている。〈昆虫記といってもそれだけのものではない。昆虫の形状や生態についての微細な観察を土台に、鋭利な文明批評、自然観、人生観がちりばめられている〉と日沼倫太郎が指摘している<sup>22</sup>ように、北杜夫の蝶に関わる創作の世界にその独自の深みがあるのである。

## 5. 終わりに

蝶は北杜夫にとって自然、精神の最たる象徴である。飛翔する蝶、飛翔力のある揚羽蝶(鳳蝶)、世界的な珍蝶であるフトオアゲハのために、「谿間にて」は北杜夫がその作家の気質、精神の原点、理想からして書かざるを得なかった作品だと言えよう。「谿間にて」は、村松剛がいう「北の短編のうちで、記念碑的な作品」であるだけでなく、台湾を舞台にした、珍蝶中の珍蝶であるフトオアゲハのために書かれた、北杜夫の珍重不朽の傑作なのである。

---

<sup>21</sup> 野島秀勝「北杜夫における〈自然〉—楽園と楽園喪失」『特集 遠藤周作と北杜夫』(『國文學 解釈と教材の研究』昭和 48 年 2 月)

<sup>22</sup> 日沼倫太郎「解説」『とくどるマンボウ昆虫記』(昭和 36 年、文庫本昭和 42 年)

テキスト：

- ①北杜夫「谿間にて」、日本文芸家協会編集『1959 創作代表選集』  
（昭和 34 年前期）収録。
- ②北杜夫「谿間にて」、『北杜夫集』（新潮日本文学 61 新潮社昭和  
43 年 10 月）収録。

参考文献：（著者名、五十音順）

- ・鵜飼哲夫（2015）『芥川賞の謎を解く』文春新書 1028
- ・奥野健男（1982）『北杜夫の文学の世界』中公文庫
- ・北杜夫（1960）『どくとるマンボウ航海記』中央公論社、中公文庫  
（1965）
- ・北杜夫（1967）『どくとるマンボウ昆虫記』角川文庫
- ・北杜夫・辻邦生（1974）『若き日と文学と』中公文庫
- ・白水隆（1960）『原色台湾蝶類大図鑑』保育社
- ・素木得一（1935）『台湾産の蝶類に就て』（台湾総督府内務局『天然記念物調査報告 第三輯』）台湾総督府史跡名勝天然記念物調査委員会
- ・戸田一康（2013）「北杜夫の最初期作品群に反復される主題——自然と精神——」『2013 年度台湾日本語文學會國際學術研討會會議手冊』於淡江大学
- ・なだいなだ（1968）「解説」『新潮日本文学 61 北杜夫集』新潮社
- ・平野謙（1978）「文芸時評 昭和三十四年二月」『文芸時評』河出書房新社

資料類（五十音順）

- ・『芥川賞事典』（『国文学解釈と鑑賞』536）至文堂 1977 年
- ・『國文學 解釈と教材の研究』第 18 卷 2 号（學燈社）『特集 遠藤周作と北杜夫』昭和 48 年（1973）2 月
- ・『國文學 解釈と鑑賞』501（至文堂）特集『北杜夫の文学世界』1974 年 10 月

- ・「第四十三回芥川賞選評」『芥川賞全集』第六卷、文芸春秋社  
1982年

## 台灣日語教育學報第27号